

## 第二言語習得過程における言語転移の認証を求めて

—名詞修飾における「の」を中心に—

奥野 由紀子

### 詳細目次

0. 司会者による講師紹介
1. 研究の原点
  - 1.1. なぜ「言語転移」をテーマに？
  - 1.2. 辛い博士課程1年目
2. 言語転移研究のありかた
  - 2.1. 言語転移の捉え方《博論第2章》
  - 2.2. 「言語転移研究」への切り口
  - 2.3. 対象言語は何言語必要？
  - 2.4. 「の」の過剰使用に関する先行研究《博論第4章》
  - 2.5. 先行研究からの示唆と課題
3. 博論研究のデザインと結果
  - 3.1. 博論全体のデザイン
    - 3.1.1. 研究の方法
    - 3.1.2. 調査計画
  - 3.2. 各章の方法と結果
    - 3.2.1. 縦断研究《博論第5章》
      - 3.2.1.1. 研究のデザイン
      - 3.2.1.2. 縦断的な発話調査の結果
    - 3.2.2. 横断研究《博論第6章》
      - 3.2.2.1. 研究の概要
      - 3.2.2.2. 即時的処理を求める文法性判断テスト
      - 3.2.2.3. 言語転移の可能性
      - 3.2.2.4. 「の」の過剰使用における言語転移の可能性
    - 3.2.3. 上級学習者の「の」の過剰使用にみられる言語転移の様相《博論第7章》
      - 3.2.3.1. 誤用訂正テスト
        - 3.2.3.1.1. 誤用訂正テストの概要
        - 3.2.3.1.2. 誤用訂正テストの結果
      - 3.2.3.2. OPI(運用レベル)
        - 3.2.3.2.1. OPI(運用レベル) 結果①
        - 3.2.3.2.2. OPI(運用レベル) 結果②
      - 3.2.3.3. 考察
        - 3.2.3.3.1. 上級における言語転移の様相
        - 3.2.3.3.2. 言語転移と理解と運用
        - 3.2.3.3.3. 複合的要因
  4. 結論
    - 4.1. 言語転移研究の認証方法の現状と課題

- 4.2. 学習者の「の」の過剰使用状況
- 4.3. 「の」の過剰使用に関わる諸要因
- 4.4. 言語転移の可能性
- 4.5. 言語転移の様相
- 4.6. 複合的要因
- 5. 博論提出以降の展開
  - 5.1. 博士論文が本になる→奥野(2005)
    - 5.1.1. 博論への反響
      - 5.1.1.1. 展望1：山内(2006)より
      - 5.1.1.2. 展望2：徳永(2005)より
    - 5.1.2. 出版の副産物
      - 5.1.2.1. 言語双方向的検討金・奥野 (2005,2007)
      - 5.1.2.2. 言語双方向的検討の可能性
      - 5.1.2.3. 展望3
  - 5.2. 研究を続けていく上で必要なこと
- 6. 質疑応答
  - 6.1. 転移の認定
  - 6.2. データ収集方法

参考文献

関連書評・研究など

稿末資料

名詞修飾節の習得に関する奥野由紀子氏の主な業績 (抄)

## 第二言語習得過程における言語転移の認証を求めて —名詞修飾における「の」を中心に—

奥野 由紀子

本稿は、2008年5月10日にお茶の水女子大学で開催された第二言語習得研究会（関東）第65回例会で奥野由紀子氏がおこなった同題の講演をもとに加筆・再構成したものである。録音の文字化は佐々木嘉則の監修のもとで高橋織恵と菅生早千江が担当した。

### 0. 司会者による講師紹介

本日の講演には、横浜国立留学生センター准教授の奥野由紀子先生をお招きしています。

「転移」は第二言語習得研究において最も重要な概念の1つですが、学習者の実際の用例、たとえば中国語母語話者の「赤い花」という誤用が母語転移の結果か否かをどうやって認証するかは実はとても難しい問題です。奥野先生の博士論文「第二言語としての日本語習得過程における言語転移の研究—「の」の過剰使用を中心として—」はこの研究方法論上の難問にとりくんだ労作で、先生はこの業績により広島大学（日本言語文化教育学専攻）より教育学博士号（2002年度）を取得なさっています。

山内博之先生は奥野先生の論文を次のように評しておられます。

「誰もが怪しいと思っているのになかなか捕まらない犯人を理詰めで追い詰めていく推理小説を読んでいるようだ、というのが、本書に対する評者の印象である。「誰もが怪しいと思っているのになかなか捕まらない犯人」とは、もちろん、「の」の過剰使用に対する中国語からの言語転移のことである。……

「犯人」を捕まえることができなかった理由は、言語転移の認証方法の不備にあることを、奥野氏はつきとめた。そして、言語転移の認証方法を本書によって確立した。……このような言語転移研究の方法を確立したことが、本書の最大の意義であり、学界への貢献であると評者は考える。本書は、古くて新しいテーマである言語転移研究の再出発点になると言える研究業績であり、今後、言語転移研究が行なわれる際には、奥野氏が提唱した認証方法は、必ず、顧みられなければならないものだと思う。

（山内 2006: 111）今日はその名推理のエッセンスをお聞かせいただけるということで、私も前々から楽しみにいたしておりました。それでは奥野先生、よろしくお願ひします。

### 1. 研究の原点

#### 1.1. なぜ「言語転移」をテーマに？

今日は、これから論文を書こうとしている院生の方を対象にと窺っていますので、まず、なぜこのテーマに取り組むようになったのか、そのいきさつからお話ししたいと思います。

また、私が折にふれ、周りの先生方から言われて心に残ったようなことも織り交ぜながらお話ししようと思います。

まず修士の授業のときに、ある先生から私の発言に対して「それは経験のない方がおっしゃることですね」と言われたことがありまして、「ああ痛いなあ」と思いつつ、確かに大学の学部を出てすぐ大学院に入ったので、（ボランティアとかではやったりしていましたが）きっちりとした経験を積んでいなかったということもあり、これは、本当に何をしたいのかを知るためにも、一度どっぷりと教育の現場に浸かってみたいと思ひ立ち、テーマ探しのさすらいの旅に出ました。

その中で、行く前に興味があつて調べていた自己効力感や文化適応などのテーマを引きずりながらも、教えていく中で、ひとつ大変気になったのが「先生、私のパーティーに来たいですか。」とか「先生、たすけて、手伝ってほしいですか」とか「コーヒー飲みたいですか」というような、学習者の発話でした。これは、文法的には正しいんですけども、日本人

としてはひっかかりますよね。「ああパーティー……行ってもいいけど……」みたいな【会場笑】。また、ホームステイもしていたんですけども、そこのお父さん・お母さんが、外出を予定していたけれどもベビーシッターが急に来られなくなり、子どもをどうしようかと困っていたときに、「じゃあ私ที่บ้านにいきましょうか」という風に言うと、“Do you want to stay home?”と言われまして、「いやあ、いたいわけではないけど…」みたいな【会場笑】。その時も微妙な気持ちになりまして、ああ、これは多分英語の影響なんだろうなあ、だから「私のパーティーに来たいですか」のように、英語話者は、依頼するときや誘う時にも、英語では“Do you want to ~?”が使用できるので、日本語でも使っちゃうんだなと思いました。しかし、このようなモノは、すごくコミュニケーションに支障をきたすんじゃないか、と思ひまして、これをひとつテーマにしてみようと思って帰ってきました。そして、やはり先行研究では「これは英語の影響です」というような研究が多かったんですね(水谷 1985; 鶴田 1998; 大石 1997)。

しかしながら、よく見てみると英語の言語転移以外の要因もあるんですね。例えば教科書をみたらわかるとおり、「夏休み、どこに行きたいですか」「海に行きたいです」、「週末何をしたいですか」「～をしたいと思います」というような Q&A の教え方があったりですとか、「～ませんか」「～しましょうか」の区別がつかなかったりであるとか、「行かない?」とか「行く?」とか、ない形とか辞書形を使って誘うような方法を、特に海外で勉強している場合には知らない。そういういろいろな要因が絡まっている。滞日歴を調べましたら、滞日歴の長い人はそういう誤用が少ないとか、調査してみるといろいろなことがわかりまして、言語転移だけではなくていろいろな要因が絡まっている、言語転移を認定するのは難しいということが、そこでわかったんですね。

そしてそういうことを書いて、それを『日本語教育』に投稿したんです。そうしたら結果は「×」でした【会場笑】。その査読のコメントとして、「言語転移とそれ以外の要因との関連を追及するならば、他の言語の母語話者も対象にしなければ真に明らかにできない」というようなコメントをもらったんです。「ああ、それはそうだなあ」と思ひまして、それが、私が言語転移に取り組もうと思ったきっかけになりました。

## 1.2. 辛い博士課程 1 年目

しかし博士課程で言語転移を追おうと決めたものの、壮大なテーマ過ぎて、真正面から取り組めるかどうか、非常に不安になりました。イメージとしては象のお尻にネズミが齧りつくような感じがしてですね、ネズミがちょっと齧ったところで痛くも痒くもないんじゃないかっていうような【会場笑】……途方にくれました。また、指導して下さる先生の 1 人からは、願望希望文の「～たいですか?」を対象に選んでしまうと文化的背景とか語用論的な要因が関わってくるので、それで言語転移のメカニズムを解明するのは難しいだろう、と言われました。

そこで、またテーマ探しが始まりました。そんな時に先生方から言われたのは「あせらず文献研究をきなさい」ということと、「学習者言語を観察しながらデータを蓄積していきなさい」ということでした。また、その、細かい小さな事象だけを見てやるのではなく、「博士課程に入るということは、その理論に貢献するとか、それを通して何を知りたいのか、大きな枠組みを考えなければいけない。枝を見て森を見ずというのではダメだよ」とも言われました。また、悶々としている時に相談にいくと、「ああしなさい、こうしなさい、というのは言えるけれども、やっぱり自分でこうしよう、これを追おう、とか、これについて知りたいという、自分で決めなければ続かないよ」という意味で、「大切なのは自己決定だよ」と言われまして、1 年間ちょっと放置されていたという感じでした……【会場笑】。

## 2. 言語転移研究のありかた

「どういうふうにしたら言語転移というものを見ていけるのかなあ」と思ひながら、1 年間、文献研究をしていました。その、辛かった時期にまとめたのが、博論の 2 章から 4 章になります(図 1)。

### 2.1. 言語転移の捉え方《博論第 2 章》

そのうち 2 章では言語転移全般について、主に英語を対象とした文献研究をしまして、言語転移研究の課題を抽出していきました。次に 3 章では、日本語を対象とした習得研究で、言語転移を扱っているものを見まして、その問題点などを見ていきました。次に、もうちょっと後になりますけれども、それらを見ていく中で「の」の過剰使用を対象にしようと狙いを定め、「の」の過剰使用に関する文献研究を行い、問題点と課題を見ていきました。

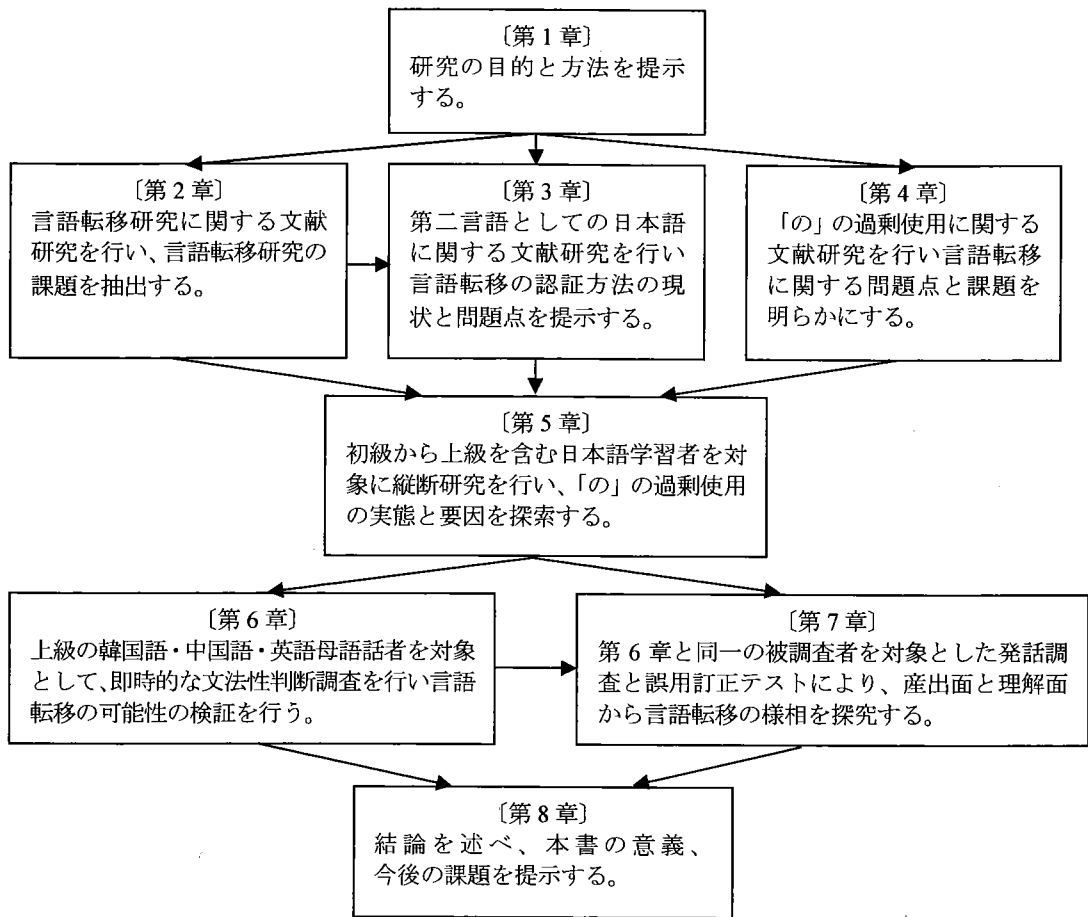


図1 奥野 (2002, 2005) 博論構成図

第2章では、言語転移研究に関する文献研究を行いました。史的変遷については時間の関係で割愛させていただきますが、言語転移の定義をここで述べておきます。言語転移とは、「母語やそれ以外にこれまで学習した言語と、目標言語の類似点および相違点から、学習者の意識的、無意識的な判断により、目標言語でのコミュニケーション上や習得の過程上に現れるさまざまな影響」としました。漠然としているようですが、そのさまざまな影響というものを、誤用とか、回避、過剰表出、促進作用、過程的転移、母語以外からの転移などの、先行研究を見ながら見ていきました。

その結果、言語転移は、習得のスピードや、発達順序に影響を及ぼすこと、また言語間の距離や言語有標性に関わる学習者の心理的な構えが関係していること、また文化的社会的な転移であるとか、母語

以外の学習者言語の転移の存在などが実証的に検討されつつあるということがわかりました。

## 2.2. 「言語転移研究」への切り口

しかしながら、私の小さな修士論文だけではなく、第二言語習得に関する他の論文、たとえば、必読の重要文献とされる Dulay & Burt (1973, 1974)、これは多くの誤用例を検討しそのほとんどが「言語転移ではない」と判断している研究ですが、これにも方法的な問題が指摘されていることも知りまして、「なんだ、みんな大変なんだ、これは一筋縄ではいかない難しい問題なんだなあ」と改めてわかるようになってきました。そうしまして、現代の中間言語研究の時代における言語転移研究の課題として、3つを挙げました。ひとつは認証方法に問題がある可能性がある。もうひとつは言語処理レベルと言語転移との関連性が明らかになっていない。そして、言語転

移と、言語転移以外との要因との関連性が明らかになっていない。「これは言語転移だ」「言語転移じゃない」というような論文はあるんですけども、じゃ、言語転移以外との要因との関連性はどうかを調べたものは、この時点ではあまりなかったんですね。

### 2.3. 対象言語は何言語必要？

そこで博論の第3章で、日本語を対象とした習得研究における転移の判定方法と現状の問題点を総括しました。日本語を対象とした研究47篇を調べましたところ、1言語のみを対象とした研究では8割が「言語転移です」と認定していた。しかしながら、2言語→3言語→それ以上と、言語数を多く対象とすればするほど、言語転移と結論づける研究は少なくなり、3言語あるはそれ以上を対象として扱った研究のうち、言語転移と結論付けたのは、たった1篇しかなかったんですね。だから、これまで言語転移だと言っている研究は、ある意味、恣意的、主観的判断だと言わざるを得ないということがわかりました。

じゃ、何言語の母語話者からデータを集めたいのか、ということになります。

これは一概にはなかなか言えないと思うんですけども、韓国語では「赤い花」を「빨간 꽃」というので、形容詞の前に「ウィ(wi)」をつけないわけです。そこで、韓国語を母語とする日本語学習者が実際に「赤い花」と表出していたとしますね。一方、中国語では「赤い花」を「红色的花」というように形容詞の前に「的(da)」をつけます。そこで、中国語母語話者が、日本語で「赤いの花」と表出していたとします。そうすると、「これは韓国語の正の転移で、中国語では負の転移だ」というふうに思いがちなんですけれども、今度は英語母語話者がやはり「赤いの花」と言ったとします。その場合、「もしかしたら言語転移以外の要因があるのかもしれない」ということになりませんか。ということで、言語転移か、言語転移ではないかというときに、第三の言語、少なくとも3つ目の言語というのは、必要だろうと思いました。

#### (1) 韓国語 빨간 꽃 (赤い花)

韓国語母語話者 「あかい花」

#### (2) 中国語 红色的花 (赤い花)

中国語母語話者 「\*あかいの花」

#### (3) 英語 red flower (赤い花)

英語母語話者 「\*あかいの花」

→言語転移の判定には2言語のみの比較は不十分であり、仮説や結果の裏付けとなる第3番目の言語が必要

こうして研究の枠組みを考えつつ、何を対象とすれば転移現象の尻尾が捕まえられるのかな、と頭を悩ましていましたが、「の」の過剰使用を対象とすることにしました。それまでは出口の見えないトンネルを1年間歩いていて感じだったんですけども、ここでやっと小さな光が見えてきたような気がしました。

### 2.4. 「の」の過剰使用に関する先行研究《博論第4章》

じゃあ、「の」の過剰使用がこれまでどのような研究がされてきたかという、ほとんどの研究が、「ああ、これは、中国語の転移です」と説明されていました。その中でも、習得研究として、きちんと調査したものとして、白畑先生のもとと、迫田先生のもとがありました。

・(白畑 1993a; 1993b; 1994)

韓国(幼児)・タイ・マレー(各1名)、初級～中級  
縦断的な発話調査 →言語転移の可能性は低い

↑

見解の相違は認証方法の問題

↓

・(迫田 1999)

英・中・韓(各20名)、初級～超級  
横断的な発話資料(KYコーパス)の分析  
中級(全ての母語) 上級(中国に多い) 超級(無)  
→発達段階によって母語による差あり

「寝るのほうがいい」

→「かたまり」のストラテジー

白畑先生の研究では、韓国語の幼児と、タイ人、マレーシア人の大人、各1名で、初級から中級の縦断的な発話調査をされていました。そしてその結果、韓国語・タイ語・マレー語は、名詞を修飾するときに「の」に相当するようなマーカーがないんですけども、にもかかわらず「赤いの花」のような「の」が出てきたので、これは言語転移の可能性は低い、と結論づけています。

一方、迫田先生の研究では、KYコーパスで初級から中級を見た場合に、中級ではすべての母語話者

に現れるんですけども、上級になると中国語母語話者の過剰使用が他の言語の母語話者に比べて多くなり、超級になるとなくなっているという結果が得られていて、そこから「発達段階によって、母語による差がある」ということをおっしゃっていました。また、「寝るのほうがいい」のときに「のほう」というような「かたまり」で「のほう」を使っているから、ここが名詞だったら「こっちのほうがいいよ」のように正用なんですけれども、「寝るのほうがいいよ」のように前に動詞をつけるると誤用になってしまう。「のほう」をかたまりで捉えているために起こるという要因も関わっている、と指摘されていました。

それなら次には「どうして同じ発話調査なのにこのような違いがあるのか」が問題になりますが、迫田先生の場合は「の」に対応する「的 (da)」という形態素が存在する中国語を含めたということと、いろいろなレベルを見ていったということが原因と思われる。2つの研究の認証方法の違いからこのように異なる結果が出たということがわかりました。

## 2.5. 先行研究からの示唆と課題

しかしながら、習得過程に共通して見られる可能性が指摘されていますし、中級では母語に関わらず表れる。「かたまり」の可能性もあります。これは、言語転移以外の要因が関わっているということです。一方、上級では中国語母語話者に多く出現しているということで、言語転移の可能性もある。言語転移のメカニズムを探るには、この「の」を対象として追うのが面白そうだと思ったんです。

しかしながら、それらの研究の限界として、中級から上級に至る縦断的データがまだなかったということと、調査方法が発話調査だけで単一的だったということがあげられます。また、学習者の個人内の誤用と正用による具体的な傾向が不明で、修飾部の品詞の違いであるとか語種による違い、「かたまり」の可能性など質的にもっと傾向を探っていかねば様々な要因は明らかにできないということが、課題として挙げられました。

## 3. 博論研究のデザインと結果

### 3.1. 博論全体のデザイン

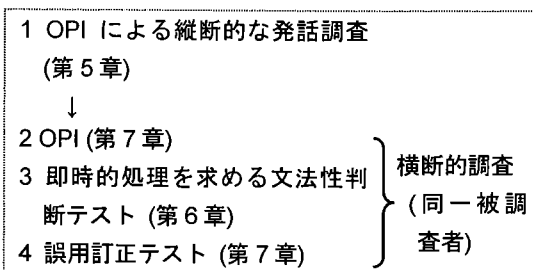
#### 3.1.1. 研究の方法

そこで、私の研究のフレームワークを立てました。3言語以上の母語話者を対象としよう、OPIによって日本語能力のレベルを測定しよう。また、縦断研

究と横断研究を併せて行い、横断研究では、発話調査の他に、2種類の異なる言語資料を求める調査を併せて行って、質的および量的な観点から考察していこう、また、被調査者は滞日歴半年以上で、教室指導を受けている、または受けた経験を持つ学習者を対象といたしました。

#### 3.1.2. 調査計画

調査計画ですけれども、以上の課題を踏まえまして、5章では上級を視野に入れた、縦断的な調査による「の」の過剰使用に関わる要因を探索していきました。そして、6章～7章では、同じ被調査者に対する横断的な調査を OPI、そして即時的な処理を求める文法性判断テスト、そして知識の理解レベルを測定する誤用訂正テストを通して行いました。



## 3.2. 各章の方法と結果

### 3.2.1. 縦断研究《博論第5章》

#### 3.2.1.1. 研究のデザイン

では、5章についてみていきたいと思います(図2)。ここでは OPI によって判定された初級から上級を含む20名、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の母語話者を対象に、縦断的な発話調査を実施しました。これは学年のはじめと終わりの10ヶ月の時間的間隔を置いた2時点で採取されたものです。

#### 3.2.1.2. 縦断的な発話調査の結果

その結果、初級から中級になると、やはり母語に

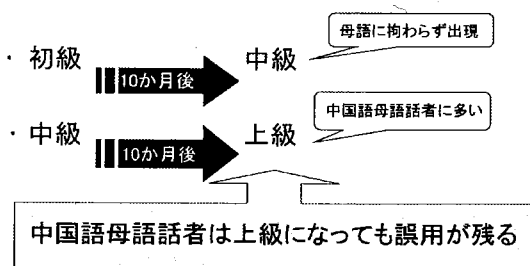


図2 初級～上級<OPI判定>、中・英・仏・独・西<計20名>縦断的(10ヶ月)な発話調査

関わらず出現しました。そして、中級から上級になると、横断的な研究結果と同じように、やはり中国語母語話者に「の」の過剰使用が多いということがわかりました。

**中国語母語話者**

修飾部の品詞に拘わらず使用する傾向

日本語: 新しい仕事・(今)来た人・日本語の勉強

中国語: 新的工作・(刚) 来的人・日語(的)学习/中国的漢字

↑  
言語転移の可能性

「かたまり」の可能性大

↓  
個人内に「のために」などが正用と誤用で出現  
(E2) \*外国語を学ぶために、漢字の勉強のために

ある「的 (da)」が作用した結果であると考えられてきて、中国語の言語転移である可能性が高いことを指摘しました。また、個人内で「外国語のために」とか「漢字の勉強のために」のように、「のために」が正用でも誤用でも使用されていることから、「かたまり」という戦略による可能性も大きいということが、この質的な調査からわかりました。

**3.2.2. 横断研究《博論第6章》**

**3.2.2.1. 研究の概要**

**被調査者**

OPI 上級レベル

3言語 (韓国語・中国語・英語) 各 10名

**【調査手順】**

OPI→**即時的処理を求める文法性判断テスト**→  
誤用訂正テスト

これにより、中国語母語話者は上級になっても誤用が残ることが、上級を併せた縦断研究でも明らかになりました。また、中国語母語話者の場合、ほかの母語話者と比べて、修飾部の品詞が「イ形容詞」か「ナ形容詞」か「動詞」かに関わらず「の」の過剰使用をする傾向が見られました。それは、中国語の修飾部と被修飾部の間ではほとんどの場合必要で

このように縦断研究の結果、上級では母語間の差があるという傾向がみてとれたのですけれども、この知見を統計的にも確認する必要があると思いました。そこで OPI の上級レベルに限り、韓国語・中国語・英語の母語話者各 10名に調査をいたしました。表 1 と表 2 は、日・韓・中・英の 4 言語の対比です。

**表 1 各言語の名詞句の例**

言語	修飾部	形容詞	動詞	名詞
日本語		新しい仕事 有名な大学	(今) 来た人	日本語の勉強
中国語		新的工作	(刚) 来的人	日語 (的) 学习/中国的漢字
韓国語		새로운 일 新しい仕事	(지금) 온 사람 (今) 来た人	일본어 공부 / (따뜻한) 물의 온도 日本語の勉強 / お湯の温度
英語		a new job	the man-who (just) came	study of Japanese/ high school teacher

(注) 網掛けは「の」に相当するものを指す。

**表 2 名詞句に関する対照分析表**

言語	比較項目	「の」に相当するもの	修飾部と被修飾部の日本語との語順比較	形容詞と被修飾部間の「の」に相当するものの有無	動詞と被修飾部間の「の」に相当するものの有無	名詞と被修飾部間の「の」に相当するものの有無
日本語		の		×	×	○
中国語		的	同	○	○	△
韓国語		의	同	×	×	△
英語		of/ 's /with, to, 他前置詞	異・一部同	×	×	○ (語順異) ×/ 's (語順同)

(注1) 網掛けは文法性判断テストによって差の検定を行う部分。

(注2) 表内の○は「の」に相当するものが必要, ×は不必要, △は場合によって必要 (不必要) を示す。



### 3.2.2.2. 即時的処理を求める文法性判断テスト

即時的な文法性判断テストの例  
 (問題例) \_\_\_\_\_ を掃除したので疲れました (×)  
 (音声) 「汚いのへやを掃除したので疲れました」  
 【調査に用いた名詞句の内訳】  
 ・ 4 品詞 (ナ/イ形容詞・動詞・名詞) を修飾部とする名詞句の正用・誤用を各 5 問 (5x2x4 = 40)  
 ・ 「~のこと」「~のため」などの「かたまり」による誤用・正用を各 10 問 (10x2 = 20)  
 ・ フィラーとして他の文法項目の正用・誤用を各 10 問 (10x2 = 20)  
 計 80 問

1 つ目の調査が、即時的な文法性判断テストです。それは、問題文がここにありますが、音声テープに沿って判断させていきました。「汚いの部屋を掃除したので疲れました」というテープの音声流れまして、問題用紙では下線部がブランクになっています。学習者は音声を聞きながら、問題用紙の下線の部分が合っている (○) か間違っている (×) か、という判断をさせていきました。これは、直感的な知識を測定しようというものです。

その結果ですけれども、誤用の判断において中国語母語話者は韓国語母語話者よりも得点が有意に低いことが認められました (図 3)。しかし、英語とはどちらも有意な差は見られませんでした。また、中国語母語話者は、全体的に、グラフを見ていただけたらわかりますけれども、成績が低く、発話調査において示された修飾部の品詞に関わらず、より「の」の過剰使用をする傾向が多い、というようなことが示されました。

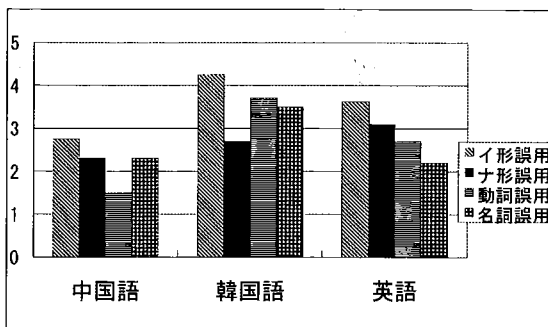


図 3 即時的処理を求める文法性判断テスト：誤用判断得点の平均値

### 3.2.2.3. 言語転移の可能性

中国語 < 韓国語 = 英語  
 ↓  

日本語 (今) 来た人、	×
中国語 (剛) 来的人、	○
韓国語 (지금) 온 사람	×
英語 the man who (just) came	×

 × (語順異)  
 英語 : 語順の違い < 中国語 : 「的」 負の転移  
 韓国語 : 「の」に相当する語の有無も語順も日本語と同様 相対的な意味における、正の転移

次に有意差が示された動詞修飾による名詞句に関して各言語を比較し、言語転移の可能性を検討していきたいと思います。分析の結果、中国語母語話者は韓国語母語話者と比較して動詞における誤用の正判断が優位に低いことが示されました。表 2 の動詞修飾による例を見ると、中国語は日本語と異なり、「の」に相当する「的 (da)」が必要なんですけれども、韓国語は日本語と同様に「の」に相当するものが不要です。このことから、すぐに中国語と韓国語の負と正の転移かと結論づけがちですが、ここで更に、3 つ目の言語である英語の動詞修飾の結果を踏まえて考察してみたいと思います。英語の動詞修飾の場合は、語順が異なり「の」に相当する語は日本語や韓国語と同様に不要です。しかしその英語母語話者とは優位差がなく、中国語母語話者のみが韓国語母語話者より優位に低いということは、語順の違いよりも中国語の動詞と被修飾語の間に必要な「的」が負の転移として作用したという解釈を裏付けられるかと思います。また韓国語は「の」に相当する語の有無の条件は英語と同じですが、語順も日本語と同様で、韓国語母語話者にとっては心理的・言語的な距離が近く、習得に有利に働いたと考え、相対的な意味において正の転移の可能性が示唆されたと判断しました。

### 3.2.2.4. 「の」の過剰使用における言語転移の可能性

このような上級における中国語母語話者の「の」の過剰使用は、「過程的転移」(山岡 1997) であるとみなせそうです。過程的転移とは、「第二言語習得における自然な発達過程の中に、学習者の母語に相当する段階がある場合、その学習者は、そのような形式が母語にない学習者よりもその段階に長くどまる」というものです。

しかしながら、それは理解面からくる違いなのか、また実際の運用面ではどうなのか、言語転移以外の要因はどうか、という更なる疑問が残っています。そこで次章において、言語転移の可能性が認められた同じ被調査者に対して、誤用訂正テストと、発話調査を分析し、上級レベルにおける言語転移の様相を、知識と運用という異なった言語処理レベルから追求していくことにしました。

### 3.2.3. 上級学習者の「の」の過剰使用にみられる言語転移の様相《博論第7章》

#### 3.2.3.1. 誤用訂正テスト

##### 3.2.3.1.1. 誤用訂正テストの概要

ではまず、誤用訂正テストについて説明します。これはOPIと文法性判断テストが終わった後に実施したものです。この誤用訂正テストは、主に理解レベルの知識を見るものです。さきほどの文法性判断テストと同じ文をランダムに並べかえて質問紙で提示しました。

##### 誤用訂正テスト (理解レベル)

汚いのへやを掃除したので疲れました (×)  
やせるのために毎日ジョギングをしています (×)

同じものですね。ゆっくりと自分のペースで行うように指示しまして、問題文の名詞句の下線の部分の文法性を「○」、「×」で判断させ、さらにどこが間違っているのか、正しく訂正するように言いました。分析方法も同じようにいたしました。

##### 3.2.3.1.2. 誤用訂正テストの結果

その結果、母語の差はなく、成績はどの母語の話者も高いことがわかりました (図4)。つまり、中国語母語話者も知識としては「の」の用法を正しくわかっているということですね。しかしながら、差が

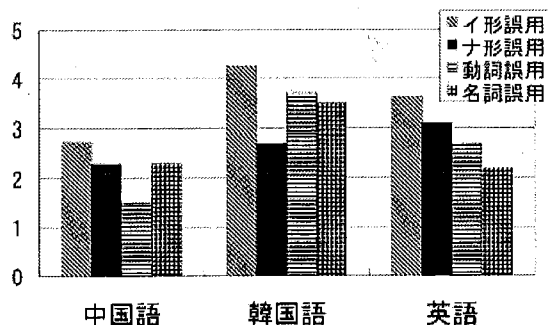


図4 誤用訂正テストの判断得点の平均

出たところは、動詞とナ形容詞の違いです。これにより、どの母語話者もナ形容詞が難しいということが明らかになりました。これは、日本語のナ形容詞の場合、特に漢語の場合、「健康な体」とか、「自分の健康」というように、形容詞にも名詞にもなることから、品詞の区別がつきにくく、品詞による混同のない動詞よりも、どの母語話者にとっても難しいと考えられます。つまり、理解レベルにおいて、ナ形容詞はどの母語話者にとっても難しいということがわかりました。

#### 3.2.3.2. OPI (運用レベル)

##### 3.2.3.2.1. OPI (運用レベル) 結果①

そして、次に発話調査のほうを見ていきたいと思えます。さきほどの即時的な判断と、誤用訂正をした同じ人を見てみますと、実際中国人の場合は10名中5名が「の」の過剰使用をしていました。英語母語話者も、1名「の」の過剰使用が出ていました (表3)。

表3 「の」の過剰使用が見られた上級学習者

中国語	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10
韓国語	K1	K2	K3	K4	K5	K6	K7	K8	K9	K10
英語	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	E8	E9	E10

それを詳しく見ていきますと、やはり動詞による修飾が多いということがわかりました。それは、52例「の」の過剰使用が出たんですけども、うち28例が動詞の修飾で、54パーセントを占めていました。もう少し詳しく発話資料を見ていきますと、「の」の過剰使用には、「かたまり」と思われる誤用が多く含まれていることに気がつきました。

##### 3.2.3.2.2. OPI (運用レベル) 結果②

そして、正用も誤用も含めて分析し、かたまりの可能性のあるものを高い順に以下の3つに分類しました。

必ず「の」を付随して使っているもの。これは、「不便のところ」「違うのところ」「自分いたのところ」「作っているところ」「同じイメージのところ」。正用も誤用もありますけれども、その人が「ところ」を使うときには必ず「の」を付随して使っているものです。

そして、もうひとつが、ほとんどが、「やっている

の感じ」「しないの感じ」「話しするの感じ」。「感じ」のときには「の」を付随しているんですけども、1、2例、「きちんとしている感じ」のように、使用していない場合もたまにあるというもの。

そして、揺れているものですね。付随したりしなかったりしている。

「汚れたもの」「取るのやりかた」、「自分のやりかた」、「こういうやりかた」、「詳しいやりかた」。

<p>1 必ず「の」を付随 (C8) *不便のところ、*違うのところ、*自分いたるところ、*作っているのところ、同じイメージのところ</p> <p>2 「の」を付随しない形態も使用 (C8) *やっているの感じ、*しないの感じ、*話すの感じ、*見てるの感じ、*きれいの感じ、*グローバルの感じ 自分の研究だけの感じ、きちんとしている感じ</p> <p>3 「の」を付随したりしなかったりする場合 (C3) *汚れたものとのやり方、自分のやり方、こういうやり方、詳しいやり方 「かたまり」による可能性が高い誤用は全「の」の過剰使用 (52 例中 33 例) =約 65%</p>
--

このうち、かたまりとして使っている可能性が高いだろうと思われる、1番と2番を、「かたまり」というように私は認定しまして見たところ、すべての過剰使用、52例中、33例がこのような「かたまり」と一緒に使っていることがわかりました。それは、全体の65パーセントを占めるということですね。で、何を「かたまり」として捉えているかは、学習者によって違うのですが、「感じ」とか「ところ」などの抽象的な語彙である傾向があることがわかりました。

### 3.2.3.3. 考察

#### 3.2.3.3.1. 上級における言語転移の様相

それで、上級における言語転移の様相を見ていきますと、OPIにおける上級レベルというのは、皆さんもご存知のとおり、段落の長さで話す人たちですよ。内容のある連続した談話の枠組みを用いて、ある一定の流暢さとか正確さを維持しながらコミュニケーション可能なレベルであり、描写や説明ができる、と言われていました。また、人間の情報処理過程においては、自動的処理なものと統制的処理があ

ると考えられていますけれども、自動的処理とは、習慣が自動化され、注意を払う必要がない処理のことを表します(表4)。統制的処理とは、注意を払って行う処理とのことを表しますけれども、流暢な言語表出において注意を払う統制的処理を受けるのは、文の意味的な面であり、上級になると、言語的な面は自動化されているというふうに考えられています。このことから、上級学習者のOPIに見られた「の」のような意味を持たない形態素の過剰使用は、自動化された言語処理過程において、無意識のうちに出してしまったと考えます。

表4 自動的処理と統制的処理

自動的処理(言語的)	自動化・習慣化、注意払わず
統制的処理(意味的)	注意を払う処理

実際に、中国語母語話者の日本語上級者に、「の」の過剰使用が出ているよ」と言うと、「えっ!」と驚く人が多いんですね。知識としては「使ってはいけない」とわかっているんですけども、使ってしまう。それには、音韻的に落ち着くとか、そういうことがあるのかなと思うんですけども、それについてはまだ調べて切れていません。

#### 3.2.3.3.2. 言語転移と理解と運用

では次に言語転移を更に理解と運用面の側面から考えていきたいと思います。

<p>誤用訂正テスト(母語による差なし・成績高い)</p> <p>文法性判断テスト(中国語の負の転移の可能性)</p> <p>OPI 発話調査(中国語母語話者に多い)</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>自動化された言語処理過程における言語転移</p> <p>・被調査者 C2 研究発表の際にみられた事例 配布資料:「第三者の結果提示から始まるので、」 口頭発表:「第三者の結果提示から始まるの研究の調査なので」</p>
--

「の」の使用に関する理解レベルを測る誤用生成テストでは、母語に関わらず差が見られず、成績も高かったことから、上級レベルは知識としては母語に関わらず、ほぼ理解できていることがわかりました。しかしながら即時的な処理を求めるところでは、言語転移の可能性が示されました。それを実際に表

す例として、面白い事例がありました。

配布資料例(1):「今回のリフレクションは第三者の結果提示から始まるので、」

口頭発表例(1):「今回のリフレクションは第三者の結果提示から始まるの研究の調査なので」

配布資料例(2):「どういうタイミングで自分の主観的意見を提示するかということは重要」

口頭発表例(2):「どういうタイミングで自分の主観的意見を提示するかということは重要」

中国人の大学院生が、発表のときに、配布資料には「自分の主観的意見を提示するか」というふうに入らずに書いてあるんですけども、発表のときに聞いていると、「自分の主観的意見を提示するか」と「の」を入れて発表してしまっている。こういう過剰使用はその発表の中で何回か出てきました。このように、配布資料を準備するときには、ちゃんとできているのですが、口頭発表となると、特に意味とか内容のほうに意識が行っていきませんよね。

同じような「の」の過剰使用例が他にも口頭発表中に見られました。

口頭発表例(3):「授業では新しいの方法を考えています」

口頭発表例(4):「授業に関する態度は同じで」

口頭発表例(5):「同じの先行研究のところ」

口頭発表例(6):「第三者によるリフレクションなので」

もちろん、上級、超級になる人ですから、言語処理の部分には自動化しているのですが、そういうときには「の」が出てしまうので、やはり無意識的なものなのだろうと思いました。

### 3.2.3.3.3. 複合的要因

では次に、複合的要因について話したいと思いません。誤用訂正において「かたまり」も、母語による差は見られず、成績が高いことがわかりました。しかし、発話調査によると、中国語母語話者に「かたまり」による「の」の過剰使用が多いことがわかりました。このことは、上級になっても、運用レベルにおいて、言語転移が「のほう」や「のために」などのかたまりを分析的に捉えることを遅らせている可能性があると考えられます。つまり、言語転移とその「かたまり」の複合的な要因が、中国語母語話

者に「の」の過剰使用を長く残させているといえると思います。また、理解レベルでは、ナ形容詞の成績が低い傾向にありましたが、実際の運用面では、動詞の修飾による「の」の過剰使用が多く見られました。「違うのところ」、「作っているところ」にみられるように「かたまり」が関係していて、知識レベルでは確かにナ形容詞の方が難しいんですけども、表出の時には動詞に多いのは、そういう「かたまり」が関係していると推察されます。

このような複合的要因を端的に示していると思われる例がありました。

#### b. (C8) \*自分いたのところ

「修飾部+のところ」の例

同じイメージのところ、\*不便のところ、

\*違うのところ、\*作っているところ

「いたの+被修飾名詞」の例

\*自分いたの都市、\*自分にいたの国は、\*今いたの研究室

この人 (C8) は、「自分いたのところ」のような誤用が出ました。そして、他で「のところ」をどう使っているのかなと思うと、「同じイメージのところ」「不便のところ」「違うのところ」「作っているところ」と、やはり「かたまり」で使っているようですね。では、「いたの」ではどうかと見ますと、「自分いたの都市」「いたの国」「今いたの研究室」と、「いたの」も「かたまり」で使っている (図5)。

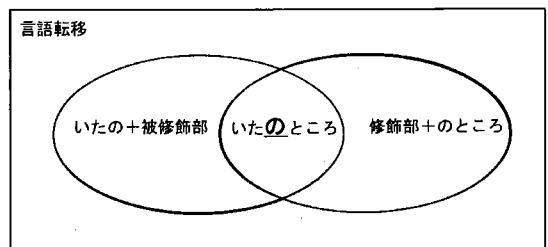


図5 「\*いたのところ」にみられる複合的要因

だから、この「自分いたのところ」は、修飾部と被修飾部の両方から「かたまり」になっていて、「の」の過剰使用がより消滅しにくいと思われる誤用でした。重なってより強固に、なかなか分析的に捉えられなくなっていると思われました。しかし、それがどういうふうになくなっていくかは、まだ研究できていないんですね。それについては、誰かやって

いただけないかなと思っています(笑)。

では、結論に移りたいと思います。

#### 4. 結論

##### 4.1. 言語転移研究の認証方法の現状と課題

私の博士論文では、言語転移研究の認証方法の現状と課題を考えていきました。従来の言語転移研究における課題の中で、特にその認証方法と、条件の妥当性について検討した結果、1 言語のみを対象として結論付けている研究が圧倒的多数であるということ、3 言語以上を対象とし、修飾レベルや学習環境を統制して言語転移を認証した研究はほとんどないという現状を指摘しました。また、これまで表層レベルにおける言語転移の有無に終始するのではなく、言語転移をとりまく要因との関連性であるとか、異なる言語処理レベルからのアプローチによる、より深いレベルにおける言語転移の様相の解明を課題として挙げました。

##### 4.2. 学習者の「の」の過剰使用状況

そして2つ目は、学習者の「の」の過剰使用の状況を明らかにしました。これは、学年の始めと終わりという2時点における発話調査により、初級から中級になると「の」の過剰使用が出現し、正用と混在することが明らかとなりました。これは、先行研究の記述とも併せ、中級では「の」の過剰使用は母語に関わらず共通して見られる現象であるといえます。しかし上級になるとほかの母語話者では「の」の過剰使用による誤用は消滅に向かいますが、中国語母語話者は上級になっても「の」の過剰使用が依然として残り、新たに出現する学習者も存在することがわかりました。また、中国語母語話者は他の母語話者とは異なり、名詞修飾の被修飾部の品詞に関わらず、広範囲に「の」を使用する傾向があることが明らかになりました。

##### 4.3. 「の」の過剰使用に関わる諸要因

そして3つ目が、どのような要因があるかですけれども、それは学習者の「の」の使用状況や文法性判断テストや誤用訂正テストから、その要因には、格助詞「の」の過剰般化であるとか、ナ形容詞と名詞の区別の混乱、学習者の言語処理のストラテジー、そして言語転移という、いろいろな要因が各習得レベルおよび言語処理過程において関与しているというを示しました。

##### 4.4. 言語転移の可能性

そして4つ目が、言語転移の可能性ですが、発話調査において、母語による差が示されていた上級学習者を対象として、即時的な文法性判断テストを実施した結果、特に動詞の修飾において、中国語の負の転移と、韓国語の正の転移が関与していること、また、言語転移の作用により、中国語母語話者は、修飾部の品詞に関わらず、「の」を過剰使用することが、統計的かつ言語学的に認められました。このことから、上級になっても中国語母語話者には「の」の過剰使用が残ったり、新たに出現したりすることは、過程的転移で説明できることを指摘し、「の」の過剰使用に言語転移が関与していることを示しました。

##### 4.5. 言語転移の様相

5つ目が、言語転移の様相についてです。言語転移の可能性が検証されましたけれども、同じ被調査者に対する時間的な余裕がある誤用訂正テストを行ったところ、学習者は母語に関わらず、知識としてはほぼ正しく理解していることが明らかになりました。しかしながら、同じ被調査者に対する発話調査においては、やはり中国語母語話者に「の」の過剰使用が多いことが明らかになりました。

このことから、自動化が進んで、言語形式ではなく、意味に直接アクセスする上級においては、即時的な処理が求められる場合や、実際の運用場面において、無意識的に言語転移が作用し誤用が生じることを指摘しました。

森山新先生も指摘しておられるとおり、自動化が進んでいない学習初期においては、学習者はまずは意味を母語で表現し、それを目標言語で置き換えるというストラテジーを多く用いるのに対し、自動化が進んだ後においては、意味が直接目標言語に変換されるとし、化石化とか逆戻りの現象が自動化の進行の中で起きる、ということをおっしゃっています。上級における言語転移のメカニズムについて、言語知識では自動化以前の、母語から目標言語への変換を行っている段階では、モニターとして発揮できても、自動化が進むとモニターとして作用しにくく、化石化や逆戻り現象が起きる。そういうことが関わっていると思います。

##### 4.6. 複合的要因

もうひとつ最後に指摘したのが、複合的要因ですね。文法性判断テスト、および発話資料の分析から、

「の」の過剰使用の要因として、ある特定の語と「の」をひとかたまりとして捉える、言語処理のストラテジーが関与している可能性が明らかとなりました。

さきほど述べ忘れましたが、「かたまり」だけでも文法性判断テストと誤用訂正テストをしてみたところ、文法判断テストにおいては、母語にかかわらず、例えば「\*やせるのために」を正しいと誤判断してしまう傾向があることが明らかとなりました。誤用訂正テストでは、学習者は知識としては分析的に正しく理解していることもわかりました (奥野 2004)。つまり「かたまり」は、中国語母語話者だけに見られるものではなく、どの母語話者にも見られるストラテジーである可能性が高いということです。また、母語に関わらず、理解レベルから、ナ形容詞の品詞の区別がつきにくいことにより、「の」の過剰使用が生じる可能性も明らかとなりました。しかし、中国語母語話者には、上級になっても、「の」の過剰使用がほかの母語話者と比較して多く見られ、その中にはひとかたまりに用いていることによる誤用や、ナ形容詞による正用と誤用の揺れが多いことが明らかになりました。このことから、品詞の区別の問題解決や、定式化したパターンを分析的に捉えることを、言語転移が遅らせている可能性が高いことを示しまして、複合的要因により、中国語母語話者の誤用はとくに消滅しにくいことを指摘しました。

以上が、私の博士論文研究の概略です。

## 5. 博論提出以降の展開

### 5.1. 博士論文が本になる→奥野 (2005)

有難いことにそれが本になりました (奥野 2005)。しかし、本になったことで、何だか自分の中で完結してしまっただけですね。なんだか研究が終わってしまったような・・・、また出産を経験したりして、「これからしばらくは育児に専念しよう」と思っていました。

#### 5.1.1. 博論への反響

そのような中、書評が出まして、「まだまだやることは多いんだよ」といろいろな方から教えていただくことになりました。

##### 5.1.1.1. 展望 1 : 山内 (2006)より

山内博之先生はこの研究の意義と貢献として「誰もが怪しいと思っている犯人が、なかなか捕まえられない理由を指摘し、言語転移研究の方法論として体系化した (山内 2006: 104-114)」とおっしゃって

くださったんですが、その一方で課題と問題点としてこの本のタイトル『第二言語習得過程における言語転移の研究』が「大きすぎる。ただ、「の」の過剰使用だけを見て、こういうような冠をつけるのは、まだまだ早い。研究対象を広げて、方法論の頑健性を試していかなければならない」とご指摘くださいました。「の」の脱落とか、「のだ」の非用はどうか、と次なるテーマを提起してくださいました。それがひとつ、また私の課題となりました。

##### 5.1.1.2. 展望 2 : 徳永 (2005)より

各母語話者に特有の誤用例を他の母語話者と比較しながらケース・スタディを推進する場合の参考になる。

「実証研究と理論研究の相互構築(奥野 2005:149)」

また、徳永光展先生も書評を書いてくださり (徳永 2005)、他の誤用例とも比較しながらケース・スタディを推進していかねばならないとご指摘いただきました。

でも私が実際できるかと考えると、1人でできることは限られています。とくに留学生の方は、その国の誤用をとりあげて研究されることも多いだろうと思います。それが本当に言語転移なのか、言語転移ならいつどのように働くのか、知りたいときにこのような認証方法が何らかの参考になればいいな、と思っています。そしてそのような研究が集まっていけば、言語習得における言語転移のメカニズムが明らかになり、理論に貢献していけると思います。みなさん、言語転移について検討された場合には、ぜひご一報ください。

##### 5.1.2. 出版の副産物

そして、出版による副産物として、仲間が増えたということが挙げられます。それによって、共同研究をし始めるようになり、今まで「の」の過剰使用しかしていなかったのですけれども、「の」の脱落も対象とし、今韓国語や中国語について、もっと深く見ていけるようになりつつあります。

対象の広がり (「の」の脱落)

金・奥野 (2005, 2007) 日韓双方向的検討  
予定 :

奥野・張・金 (2008) 日中韓の対照研究  
→日韓中の双方向的検討

### 5.1.2.1. 言語双方向的検討 金・奥野 (2005, 2007)

そして、言語転移のメカニズムを探る上で、新たに、言語の双方向的検討を模索しています。その言語双方向的検討とは、たとえば名詞修飾における日本語の「の」と韓国語の「ウィ(wi)」に焦点を当て、双言語の構造上の違いを踏まえた上で、例えば韓国人で日本語を勉強している人と、日本人で韓国語を勉強している人に対して同じような調査を行って、双方向の側面から言語転移の検討を試みるということです。

日本語の「の」と韓国語の「ウィ(wi) 의」  
L1韓 L2日 ⇄ L1日 L2韓

それには私はそんなに韓国語や中国語について知らないなので、それぞれを母語とする研究者の方が、力強い仲間になっています。

#### 5.1.2.2. 言語双方向的検討の可能性

少し、手始めにしてみた調査があります。例えば、対照研究にもとづく習得難易度予測のヒエラルキーで「項目として一致しているものは習得が易しくて、枝分かれしているもの、自分の母語にないものは難しい」というものがありますけれども、それが本当かどうかを見てみました。対照研究にもとづけば、日韓で一致する項目は判断が容易だろうと予測されます。

ところが実際は予測とは異なり、日本人で韓国語を勉強している人の場合、一致しているものでも、成績はとて低かったんですね。それは、「名詞+名詞」のときに、韓国語では「ウィ(wi)」があってもなくてもいいという複雑なものがあって、たえその中で一致しているものがあっても、日本人にとっては、入れたらいいのか、入れたらいけないのか、よくわからなくなり、心理的にそのような作用により、正の転移が働かないのだろうと推察されました。また、例えば韓国人にはすごく脱落が多いんですね。では反対に、日本人が韓国語をしゃべるときは、「ウィ(wi)」の過剰使用が多いだろうという予測をたててデータを分析したのですが、実際には日本人は「ウィ(wi)」の過剰使用が出ない。つまり、誤用は表裏一致しなかったのです。

このように、言語転移は非常に複雑だ、ということが更にわかるようになってきたんですが、このように双方向的から検討することで複雑なメカニズムを探るのに、有効であろうと今のところ思っています。

予測：日韓で一致する項目は判断が容易だろう。

⇒予測と異なり、L1日 L2韓の場合、「一致」しているもので成績が低くなる。

→韓国語の「의」の複雑さ、心理的な作用により正の転移が働かない

・ L1韓 L2日における「の」の脱落が起きやすい傾向がある。では、L1日 L2韓には「의」の過剰使用が見られるか。

⇒誤用は表裏一致するとは言えない。

→言語転移の複雑なメカニズムを探るのに有効かも

### 5.1.2.3. 展望 3

習得における言語転移のメカニズムの追究  
教育への還元（言語転移の積極的利用）

展望としては、大きいのですが、これからも言語転移のメカニズムを追求していきたいと思っています。そして、対照研究時代の理論への逆行のようで最近あまり言われませんが、大人の第二言語習得の場合には母語を基盤として習得されるのは間違いないので、母語の知識はもっと積極的に教育方法に応用していい利用できると私は考えています。子どもと異なり、大人の場合は、とっかかりなく覚えるは苦手ですので、母語の知識を最大限に生かし、目標言語と違う部分は、「違う」としっかり意識させ、それを自動化させる練習をすることで誤用を抑え、化石化する前に正確さを養うことは可能だと思います。ただ、それを習得過程上のいつ行えば効果的なのか、ということももっと調べてゆく必要があります。

上級の中国語母語話者の「の」の過剰使用は、学習者は誤用であると知識としてはわかっていますが、無意識に使用してしまっているの、「の」が入っていることを指摘して意識させ、その原因を説明すると共に、運用時に使用しないよう自動化する練習が必要だと今のところ思っています。

### 5.2. 研究を続けていく上で必要なこと

最後に、研究を続けていく上で必要なこととして、1人でできることは限られているので、研究仲間をこれからは大切にしていきたい、またして欲しいと思います。また、研究への熱意を持ち続けることが難しい、そんなときにも研究仲間がいると、刺激されて、「ああ、やっぱりやらない」とひっぱっていつもらえるということがあります。

私の一番の課題ですけれども、今は仕事と育児との中で、実質的な研究の時間を捻出するのが非常に難しい。これも先輩研究者の先生方に学んでいかなければならないところです。また、研究をする上で大掛かりな調査をするなら、資金も必要ですし、科研などへも、挑戦していかなければならないなあと思っています。継続してゆくのは簡単ではありませんが、挑戦が可能な環境があることは本当に恵まれていると思いますので、感謝してやっていきたいと思っています。また、これは指導してくださった先生から言われたことなんですけれども、「いい仕事には時間がかかる」。「いい仕事」と言える仕事ができるかどうかはわかりませんが、焦らずにこれからも少しずつでも続けていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

## 6. 質疑応答

### 6.1. 転移の認定

森山新:お茶の水女子大学の森山と申します。私が、韓国にいて、お茶大で博士論文の内容を発表したときに、奥野さんから質問されたような記憶があります。そのお返しとして【会場笑】、悪い意味でもいい意味でもその感謝を込めて質問します。ひとつは、今日のご発表でも紹介されていたとおり「中国語からは負の転移、韓国語からは正の転移」といろんな人が言っているんですけれども、自分はそれがずっとひっかかっていて、そのことについて広島大学で開かれた第二言語習得研究会の全国大会(2003年12月)でも別の人に対して言った記憶があります。確かに語レベルのマーカーとしては、中国語には「的(da)」という明確なものがあるので、「の」の過剰使用はそこからの負の転移だと言えるんですけど、それに相当するマーカーが韓国語はないのか、と考えると、形態素レベルでは、動詞と名詞の間には「ニョン neun (ㄴ)」というはっきりとした連体修飾マーカーがつかます。そういったものを無視して「韓国語には連体修飾のマーカーがない、中国語にはある」と言っているのかということが、いつも引っかかるのです。さらにつきつめて考えると、日本語や英語だって、確かに形態素レベルでは連体修飾マーカーがないけれども、音のレベルではあるわけです。例えば日本語の場合、「赤い」というのと「赤い本」と言うときの音の違い(修飾関係を示す音

声的マーカー)があります。つまり、連体修飾マーカーは英語や日本語では音のレベルで、韓国語は形態素のレベルで、中国語は語のレベルで存在しているといえます。

白畑(1994)以来、あまりにも「ある」/「ない」という言い方が行き渡っていて、本当に中国語や韓国語を理解して言っているのだろうか、というもひっかかるので、その点について考えていただきたいと思います。

それから、もちろん「の」に相当するのは「ウィ(wi)의」なんですけれども、「ウィ(wi)의」だけ「の」と対応させて考えるとわからない問題がいくつも出てくるので、そのへんについてももっと考察が必要だと思います。実際に「赤いの花」という場合は、「ウィ(wi)의」とはぜんぜん関係ない問題だと思うので、「の」はいつも「ウィ(wi)의」だ、という発想でとどまるのではなく、もうちょっと何かあるように思います。語と語をつなげる時、両方とも名詞という組み合わせが一番多いので、その時に使われる「の」(「AのB」)という言い方がスキーマとして一番定着しています。そのため、そのスキーマがやたらと用いられるのが誤用に繋がるという意味で、スキーマ形成という観点から捉えたらどうか、と、いつも思っています。(迫田(2002)や野田・渋谷・迫田・小林(2001)では、こういう現象に対して「スキーマ」ではなくユニット(かたまり)形成のストラテジーという呼び方をしているようです。)

最終的には、私自身が以前ずっと韓国に住んでいて自分の韓国語学習経験が頭の奥にあるから直感的に感じるんですけれども、母語の転移という現象は、いままで言われてきているより頻繁に起こっていると思うのです。もちろん韓国語は日本語と似ているから転移がされやすい、という部分もひとつにはあると思うんですが、もうひとつには言語を問わず今までの研究の中で誤用の原因が「不明だ」ということが「転移とは言えない」ということになって、それがいつの間にか「転移ではない」と理解されるようになったと思うんです。Dulay & Burt(1973)でも紛らわしいものは全部取り除いてしまっています。転移の過小評価はその時代から既に始まっていることなんですけれど、もう少し考えていくと、転移の影響は実はもっと多い、つまり他の要因とまざった形で言語使用に



影響を及ぼしているような気がしています。

それから、奥野さんの研究の仲間が増えたということですので、ぜひ仲間を連れて、奥野さんとも時々はお会いできたらいいと思います。

**奥野**：はい、いろいろアドバイスをありがとうございました。私もこの研究の後、韓国語を学び始めて、動詞と名詞の間の「ニョン neun (ㄴ)

」というマーカーを含め考察していかなければならないと感じています。もし、「の」に「的 (da)」のような語として成立し、音声的にも「子音+母音」という同レベルのマーカーからは転移しやすいが、パッチムのような形態素で子音のみとレベルが異なれば転移しにくいとなると、転移は同レベルの形態素に起きやすいという仮説が立てられそうです。先生がご指摘くださった音や、ポーズといった音声的マーカーも、そのようなレベルの違いから転移のメカニズムをより詳細にみてゆくヒントになりそうです。そのためには形態素部分や音韻部分も含めたより詳細な対照研究も必要だと思っています。

また、スキーマ形成と関係あるというご提案をいただきましたが、確かに第一言語習得で「赤いの」が出現してから「赤いのとんぼ」が表出したり、第二言語習得でも初級から中級にかけて表出する「の」の過剰使用には、準体助詞の初級でまず習う「名詞+「の」+名詞」がスキーマとして定着し、他の品詞にも拡張して用いられると解釈し捉えていくことが可能だと思います。ただ、「のほう」や「のとき」「のために」のような「かたまり」がそのスキーマかどうかは、被修飾部自体が具体的な意味を持たないものが多いことから、「名詞+の+名詞」のスキーマとは少し違うのではないかと気がしています。

これらは中級から上級へ習得が進むにつれ多くの節を含む複文の生成がなされる過程でみられます。山内先生が書評で、上級の「の」の過剰使用では、「という」に置き換えられるものが、すごく多いと指摘してくださいました。「という」は超級になると出てくるんですけども、上級ではそれを「の」で済ませている可能性があるということです。もし超級で「という」が出るとなると「の」が消滅するということが見えてくると面白いなと思っています。これは調べてみたいと思っています。

転移は実際はもっと多いだろうというご指摘ですが、私も同感です。やはり実際に教えている場ですとか、私が韓国語を学習者として学ぶときにも、かなり日本語の知識を利用して覚えようとしています、しかしでは、「どこまでが言語転移でどれが言語転移でないか」ということを明らかにするのは、やはりなかなか難しいのだと思います。しかし、言語転移を悪者扱いにするのではなく、実際、そういうような、言語転移、母語を利用して学習するというところに、もう少しポジティブに、みんながこのような研究を通して考えていけるようになればいいなと思います。どうもありがとうございました。

**若林茂則**：中央大学の若林ですけれども、いくつかコメントと質問をさせていただきます。まずコメントですが、さっきの森山先生のおっしゃったプロソディというか、何かでマークする、という研究は、英語を扱った習得の研究でもあります。Goad & White (2006) などは代表的です。Lardiere (2007) とも似たようなことを言っていて、形態素の習得に音が影響を及ぼすということを行っているの、その辺の研究と併せると、もう少し方向性が見えてくるのかもしれないと思います。次に質問ですが、初級とか中級の段階で、みんなの母語にかかわらず出てくる「の」と、上級で誤ってでてくる「の」とは、原因は同じだとお考えですか。

**奥野**：違う部分もあうのではないかと言う風に考えています。

**若林**：すると、途中で新しい原因が出てくるということでしょうか？そこは、さっきの「転移かどうか」ということで、区別するということとすごく関係が大きいと思うのです。結局、「の」がどういうものかは「の」だけ見てもわからなくて、ほかの構造とかあるいは文の全体の知識とかを包括するような何らかの文法理論なり心理学理論で記述整理する必要があります。そうして、「こういう場合に使う「の」と、こういう場合に使う「の」とがありますよ」という枠組を作る方向でいかないと、いろいろな方向から用法の事例が出てきて、いろいろなレベルで「の」の誤用の原因があります、その原因を思いつきで書いていっても、理論に至らない。というか、結局わかることにはつながらなくて、だんだん話が難しくなっていくばかりだと思うのです。たとえば、誤りが5つ、12345

と出てきた場合に、1、2は恐らく転移が原因でしょう、4、5は語彙のかたまり、ユニットで覚えているのが原因でしょうか、5はさっき森山先生がおっしゃったスキーマでしょう、とか、そういう方向に持っていかないと、第二言語の仕組みを解明するのは難しいだろうと思いました。もちろん、原因は1つではないかもしれませんが、そういうことができるかどうかで何がどういう風に働かかが分かるようになります。さらにプラスして、さっきの韓国語の「ウィ(wi)의」という言葉と日本語の「の」が同じだと仮定するのが正しいのか正しくないのかという議論についても「この部分では同じでしょう、ここは違うでしょう」ということが、両方の言語が記述できるフレームワークで書けば、予測が立つ。予測が立つと、第二言語習得ではこんなことが起こっています、という話につながっていくだろうと思いました。

日本語の第二言語習得の最初の段階で見られる、白畑さんが言っている「転移じゃない」という「の」と、奥野さんがおっしゃっている、いつまでも残る「の」は「転移だ」ということは、別に矛盾していません。de-learn というか、いったん使い始めたものを使わないようにするのが難しいというのは、少なくとも90年代頃にははっきりと言われていたと思うんです(例 Schwartz & Sprouse, 1994)。その使い始めた形(誤った形)と同じ形が、母語にあると、母語の影響で「使わなくすること」がずっと難しくなることもよく知られています(例 Hawkins, 2001)。表面的には同じ「の」の過剰使用でも、第二言語学習者に広く観察されている誤りを指すのか、おそらく母語の影響で長く維持される誤りを問題にするのか、そこの違いだと思います。この2つを分けるような研究をしていかないと、「こういう場合もあります、こういう場合もあります、この人はこんなことをしました、この人はこんなことをしません」という話になっていってしまいます。事例を見つける分にはいいんですけども、全体像を書くには、さっきの最初のほうにありましたけれども、「枝を見て森を見ない」ということになりかねないと思います。

奥野：ありがとうございます。今後そういう方向も視野に入れて考えていきたいと思っています。

## 6.2. データ収集方法

金澤裕之：横浜国立大学の金澤です。コメントを1

つ、2つ申し上げます。まず、山内先生の書評に「タイトルが大きい」とあったそうですが、(確かに大きいけど)研究者の中には将来の展望を含めて大きなタイトルをつける方もいますから、あまり気にしないでいいでしょう【会場笑】。それから、今後の研究の方向に関してなんですけれども、今日のご発表で特に興味を引かれたのは、ある中国人留学生が自作した学会配布資料では「自分の主観的意見を提示するか」と正しい用法になっていたのに、同じ人が口頭発表では「自分の主観的意見を提示するか」と言っていた、という事例のところですか。奥野さんの博論の音声データの中心はOPIコーパスですが、この事例はそれとは異なるところから得た音声データと文字データを照合していて、そこが非常に面白いと思うんですよ。実は私が以前指導していた学生が似たようなことをやろうとして、やはり学会発表(音声)と配布資料(文字)を突き合わせ、丁寧体の作り方などを追ったことがあります。この話し言葉と書き言葉の個人内比較は、社会言語学でいうバリエーション(変異)の問題でもあるんですね。奥野さんが今日の発表の冒頭近くで研究方法について「異なる言語処理を求める複数の調査方法を併用することが必要だ」という趣旨のことをおっしゃっていたとおり、極端に言えば「1人」の学習者の言語生活を徹底的に追跡して、その人が全場面で産出する話し言葉と書き言葉を追いかけることができるのであれば、このような研究がさらに深まっていくと思うんです(このような調査を実際にやろうとすると大変でしょうから、実現可能かどうかわからないけれども)。1人の言語活動を可能な範囲で詳しく追ってみることによって、バリエーションの用例がたくさん集まると、より説得力が出てくるだろうという感じがしたんです。そんな方向も今後、大変ではあるけれど、お考えいただけたらなあ、と、一例を出しました。

奥野：ありがとうございます。この人は私の博士論文の調査対象者であり、OPIでも見た人なんですけれども、実際に発表の場面でこういうものがあったので、そういう事例も紹介してみました。そういう風に量的な部分だけではなく、質的な部分で、どのような場面で出てくるのかも面白いと思います。

若林：さっき金澤先生がおっしゃった「1人の言語

生活を深く追っていく」ということもひとつの方法だと思わなければならない、それとは別の方向で、同じ会話といってもタスクの難しさや話す内容を変えると形態素の誤りがたくさん出てくるということが知られているので、タスクをいろいろ変えてデータを取って比較するという研究デザインはどうでしょうか。たとえば日常会話で趣味について話をするのと、地球の温暖化について話をするのでは、変わってくると思うのです。

奥野：そうですね、これまでにそういうやり方でデータを集めたことはありませんが……。

司会：OPIだと、たとえば上級や超級学習者に対しても最初は初級レベルのことをやらせて、次に中級レベルのことをやらせて、というようにだんだん難易度を上げていきますよね。その段階を追って誤用の出現パターンが変化するかどうかを調べるのであれば、既存のOPIコーパスデータでもさきほど若林先生が提案なさったような分析がある程度できるのではないのでしょうか。

奥野：そうですね。そういう角度から再度データを見直してみると、「超級レベルの抽象的な話題になると一定の誤用パターンが出る」かどうか検証できるのかもしれませんが。そうするとまた言語転移のメカニズムが深まりそうです。

司会：先生ありがとうございました。【会場拍手】

#### 参考文献

- 岩淵悦太郎・村石昭三 (1968) 「言葉の習得」『ことばの誕生』日本放送協会
- 大喜多喜夫 (2000) 『英語教員のための応用言語学』昭和堂
- 大久保愛 (1967) 『幼児言語の発達』東京堂出版
- 奥野由紀子 (1999) 『日本語願望疑問文の習得に関する研究』広島大学大学院教育学研究科 修士論文 (未公刊)
- 奥野由紀子 (2000) 「第二言語習得における言語転移の認証 — 先行研究からの課題 —」『教育学研究紀要 第二部』, 46, 中国四国教育学会 384-389.
- 奥野由紀子 (2001) 「英語母語話者の願望疑問文使用の要因とその指導に関する一考察 — 『言語転移』以外の観点を含めて —」『日本語・日本語文化研究』8, 京都外国語大学留学生別科 18-30.
- 奥野由紀子 (2001) 「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察 — 縦断的な発話調査に基づいて —」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』50, 広島大学教育学部 187-195.
- 奥野由紀子・金澤眞智子・宮瀬真理・山本真知子 (2002) 「OPI 発話データにおける『テキストの型』の内容分析 — 「節」を指標とした個人内変化と判定レベルの関連性を中心に —」『日本語 OPI 10 周年記念合同フォーラム論文集』101-111, 日本語 OPI 研究会.
- 奥野由紀子 (2003) 「上級日本語学習者における言語転移の可能性 — 「の」の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて —」『日本語教育』116, 79-88.
- 奥野由紀子 (2004) 「日本語学習者の「の」の過剰使用にみられる言語処理のストラテジー」『横浜国立大学留学生センター紀要』11, 47-60.
- 奥野由紀子 (2005) 『第二言語習得過程における言語転移の研究』風間書房.
- 奥野由紀子・張麟声・金玄珠 (2008) 「名詞にかかる修飾構造の日中韓対照研究 — <の><的><>の使用の有無を中心に —」『2008 年度日本語教育国際研究大会 (於：韓国釜山外国語大学) 予稿集 2』, 54-57.
- 金玄朱・奥野由紀子 (2004) 「文法性判断にみられる日本語学習者の中間言語不確定性—連体格助詞「の」の脱落を過剰使用を中心に—」『韓国日本学連合会第 2 回国際学術大会 Proceedings』
- 金玄朱・奥野由紀子 (2005) 「日韓双方向性による言語転移の検討—名詞修飾における「の」と「ui」を対象に—」『日本語教育学会春季大会予稿集』
- 金玄朱・奥野由紀子 (2007) 「対照言語分析仮説の予測再考—「の」と「으」に関する日韓双方向的研究に基づいて—」『日本学報』73, 韓国日本学会, 39-50.
- 坂本正・小山悟 (1997) 「日本語学習者の文法修正能力」『第二言語としての日本語の習得研究』第二言語習得研究会, 9-28.
- 迫田久美子 (1999) 「第二言語学習者による『の』の付加に関する誤用」『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成 8~10 年度 科学研究費補助金研究 基盤研究 A(1) 研究成果報告書 研究代表者 カッケンブッシュ寛子, 327-334.
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 白畑知彦 (1993a) 「幼児の第 2 言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成 — 韓国人幼児の縦断研究 —」『日本語教育』81, 104-115.
- 白畑知彦 (1993b) 「連体修飾構造獲得過程における化石化現象」『平成 5 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, 55-59.
- 白畑知彦 (1994) 「成人第 2 言語学習者の日本語の連体修飾構造獲得過程における誤りの分類」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇)』44, 175-190.
- 杉村博文 (1990) 「“的”と『の』」『中国語』368, 内山書店, 21-24.
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」国広哲彌 (編) 『日英語比較講座 第 2 巻 文法』大修館書店
- 永野賢 (1960) 「幼児の言語発達 — とくに助詞『の』の習得過程について —」『島田教授古希記念国文学論集』関西大学国文学会 405-418.

- 西原鈴子・川村よし子・杉浦由紀子 (1988) 『形容詞』名柄迪監修, 荒川出版
- 野田尚史・渋谷勝己・迫田久美子・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館
- 朴在權 (1997) 『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』勉誠社
- 宮島達夫・江川清・真田信治・野村雅昭・中野洋・佐竹秀雄 (編) (1982) 『図説日本語』林大監修, 角川書店
- フォード丹羽順子・小林典子・山元啓史 (1995) 『日本語能力簡易試験(SPOT)』は何を測定しているか —音声テープ要因の解析— 『日本語教育』86, 93-102.
- 藤原与一 (1977) 『幼児の言語表現能力の発達「わが子のことば」をみつめよう』文化評論出版
- 水野義道 (1993) 「日本語『の』と中国語“的”」 『日本語学』12(11), 72-79.
- 森山新 (2001) 「中間言語の化石化と第二言語習得のメカニズム」 『世界の日本語教育』11, 55-68.
- 山岡俊比古 (1997) 『第2言語習得研究』桐原ユニ
- 横山正幸 (1990) 「幼児の連体修飾発話における助詞『ノ』の誤用」 『発達心理学研究』1(1), 2-9.
- Byrnes, H. & Thompson, I. (Eds.) (1989) *The ACTFL Oral Proficiency Interview: Tester Training Manual*, NY: ACTFL. (日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム (訳) 1999 『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』牧野成一監修, アルク)
- Clancy, P. M. (1985) The acquisition of Japanese, *In The Cross Linguistic Study of Language Acquisition*, vol.1, I. D. Slobin (Ed.), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Publishers, 373-524.
- Corder, S. P. (1967) The significance of learners' errors, *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-169.
- Corder, S. P. (1981) *Error analysis and interlanguage*, Oxford University Press.
- Corder, S. P. (1983) A role for the mother tongue, *In Language Transfer in Language Learning*, S. Gass & L. Selinker, Rowley (Eds.), MA: Newbury House Publishers Inc.
- Dulay, H. & Burt, M. (1973) Should we teach children syntax?, *Language Learning*, 23(2), 245-258.
- Dulay, H. & Burt, M. (1974) Natural sequences in child second language acquisition, *Language Learning*, 24(1), 37-53.
- Ellis, R. (1994) The study of second language acquisition, Oxford, Oxford University Press.
- Goad, Heather & White, L. (2006) Ultimate attainment in interlanguage grammars: a prosodic approach, *Second Language Research*, 22(3), 243-268.
- Hawkins, R. (2001) *Second language syntax: A generative introduction*, Malden, MA: Blackwell.
- Jarvis, S. (2000) Methodological rigor in the study of transfer: Identifying L1 influence in the interlanguage lexicon, *Language Learning*, 50, 245-309.
- Josh, A., & Homburg, T. (1983) Verification of language transfer, In language transfer in language learning, S. Gass & L. Selinker (Eds.), Rowley, MA: Newbury House Publishers Inc.
- Lardiere, D. (2006) *Ultimate attainment in second language acquisition: A case study*, Mahwah, NJ: Laurence Erlbaum.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*, Cambridge University Press.
- Schachter, J. (1974). An error in error analysis, *Language Learning*, 24(2), 205-214.
- Schwartz, B. D. & R. A. Sprouse (1994) Word order and nominative case in nonnative language acquisition: A longitudinal study of (L1 Turkish) German Interlanguage, T. Hoekstra & B.D. Schwartz (Eds.), *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, Amsterdam: John Benjamins, 317-68.
- Selinker, L. (1992) *Rediscovering interlanguage*, London: Longman.
- Taylor, P. (1976) The use of overgeneralization and transfer learning strategies by elementary and intermediate students of ESL, *Language Learning*, 25(1), 73-107.

関連書評・研究など (本書についての書評)

- 徳永光展 (2005) (書評) 「奥野由紀子著『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』(風間書房) 『比較文化』11, 97-99, 宮崎国際大学
- 山内博之 (2006) (書評論文) 「奥野由紀子著『第二言語習得過程における言語転移の研究—日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』 『第二言語としての日本語の習得研究』9, 第二言語習得研究会

おくの ゆきこ / 横浜国立大学 留学生センター  
yukokuno@ynu.ac.jp

稿末資料：名詞修飾節の習得に関する奥野由紀子氏の主な業績（抄）

#### 学位（修士・博士）論文

奥野由紀子(1999)『日本語願望疑問文の習得に関する研究』広島大学大学院教育学研究科 修士論文（未公刊）

奥野由紀子(2002)「第二言語としての日本語習得過程における言語転移の研究 —「の」の過剰使用を中心として—」  
広島大学大学院教育学研究科日本語文化教育専攻博士論文

#### 書籍

奥野由紀子 (2005)『第二言語習得過程における言語転移の研究 —日本語学習者による「の」の過剰使用を対象に—』  
風間書房

#### 学術雑誌・専門書籍に収録された主な論文

奥野由紀子 (1998)「日本語願望疑問文の習得に関する研究 —願望疑問文使用制約の調査に基づいて—」『教育学研究  
紀要 第二部』44, 398-403.

奥野由紀子 (2000)「第二言語習得における言語転移の認証 —先行研究からの課題—」『教育学研究紀要 第二部』46,  
384-389.

奥野由紀子 (2001)「英語母語話者の願望疑問文使用の要因とその指導に関する一考察 —『言語転移』以外の観点を含めて—」『日本語・日本語文化研究』8, 18-30.

奥野由紀子 (2002)「日本語学習者の「の」の過剰使用にみられる言語処理のストラテジー」『横浜国立大学留学生センター紀要』12, 47-60.

奥野由紀子 (2001)「日本語学習者の『の』の過剰使用の要因に関する一考察 —縦断的な発話調査に基づいて—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』50, 187-195.

奥野由紀子 (2003)「上級日本語学習者における言語転移の可能性 —「の」の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて—」『日本語教育』116, 79-88.

奥野由紀子 (2007)「対照言語分析仮説の予測再考 —「の」と「으」に関する日韓双方向的研究に基づいて—」『日本学報』73, 39-50. 韓国日本学会

Okuno, Y., Mitsui, K., Matsushima H., Yamada A., Yamamoto M. (2004) Analysis of 'clause' based on longitudinal speech data focusing on the use- with a focus on kedo by the advanced level of learner, *The 3rd International Symposium on OPI, The 12th Princeton Japanese Pedagogy Forum at Princeton University, U.S.A.* 31-49.